

金沢を背景とした文学より

俳句

小説

松尾 芭蕉：

「奥の細道」四一、金澤

一笑という俳諧にすぐれたものが金澤にいたのだが、芭蕉の金澤入りより半年ほど前の冬に早世した。その兄が催した追善の会で、風の音は人間の恐れの特徴ともなる音。聴覚的感性が如実に現れている。一笑の句碑立像寺にあり。

く

小松にむかう途中で。

柳陰軒句空にて

句空は元加賀藩藩士で卯辰山の法住坊という小さな寺で暮らす世捨て人。芭蕉の句として疑わしいともされているが、脱俗の心情を表すもの(西行などへの憧れ)として芭蕉の気持ちとしてよくうなずける要素がある。

聴覚が聴覚を超越して全体感覚的な空間を描き出すよ
うな句も多く作っている。

闇の夜や巢をまどはして鳴くちどり

音の記述が非常に多い。

300ページほどの中に43ヶ所

音の記述はまったくない。

短編と長編

短編Ⅱ話の核心のみを描く

長編Ⅱ情景から、全体的空間までを描く

作家の個性

島田：饒舌で情熱的文体

高橋：静かでしみいるような文体

音は風景の全体的雰囲気をよくあらわす。

読み手のイメージを多様・多層的なものにする。

情報の豊富化 認知空間を立体化

象徴的な意味世界の描写もできる。

ストーリーの描写だけでは平板になりやすい。

逆に、スムーズな話の流れが必要な場合には、音の描写が多すぎると散漫になる可能性がある。